

## 帝政ロシア刑法からポスト・ソビエト刑法の理論に向けて

上野 達彦<sup>1)</sup>

### From the Imperial Russian Criminal Law to the Post-Soviet Criminal Law

Tatsuhiko UENO

#### はじめに

帝政期ロシアの刑法(刑罰法)は、極めて過酷な刑事政策の下で圧政による治安維持のための法として、弾圧を目的とした死刑や身体刑など、封建的な刑の執行が横行していた。一方で、こうした帝政期の現実に対して民衆からの抵抗も激化していた。このような状況下において権力側からは、西欧の民主的な制度や法思想のみせかけの近代化も行われてきた。その一翼を担ってきた刑法学者のひとりがタガンツエフであった。

タガンツエフは、ソビエト時代にはあくまでブルジョア法学者の枠内に留まった人物評価であった。社会主義が崩壊した現代のロシアにあって、彼の評価も一変する。ナウモフは、タガンツエフについて次のように述べている。「タガンツエフはロシアの偉大な刑法学者」であり、「ヨーロッパ的ものさしをもった学者であり、偉業を成し遂げた人物の一人である」<sup>2)</sup>と評した。

本稿では、ロシアの刑法学者タガンツエフ博士について、その人となり、ロシア革命との遭遇、家族、そして彼の刑法理論などを素描する。

#### 一. 西欧社会の特徴と帝政ロシアの刑法学界への影響

##### (1) 概略

18世紀の西欧社会を支えた思想は、人道主義、自由主義を基礎とした啓蒙主義であった。これにともない、神・教会の権威に支えられていた中世の刑法や刑事裁判の惨酷さと専断に対し、人々は激しい怒りを現し、人間を対象として合理的なものを追求することに目を向け始めた。このような状況を背景にして、封建

制度下の刑法制度を否定することから出発した。近代刑法学は、近代市民社会・資本主義社会の発展とともに、犯罪と刑罰についての基本的な考え方(刑法理論)をめぐって、様々な諸説を生み出し、変貌を遂げてきた。

また、こうした18世紀におけるヨーロッパの啓蒙主義の普及は、人格の復権を求めるものであった。周知のようにそのような思想は、著名な啓蒙思想家－ホッブス、ロック、モンテスキュー、ルソーらに共通する社会契約説に多くの影響をうけた。

(2) イタリアのベッカリーア(Cesare Beccaria, 1738-1794)は、封建制度下の刑法および刑事裁判の無秩序さと惨酷さに対して批判を行った。

そこでは、刑罰権は社会契約の範囲内でおこなわれるべきであり、犯罪と刑罰は均衡していなければならないことが強調されていた。

(3) この時期を代表するロシアの刑法学派は、古典学派(旧派)であった。いわゆる市民社会の黎明期を象徴する古典学派の特徴は、その思想的基盤を啓蒙主義思想を背景とした自由主義、合理主義においたことにあった。またこの学派は、自由意思をもつ抽象的理性人を前提にして、人道主義的立場からの刑法の概念分析をおこない、法の下での平等から「法律なければ、犯罪も刑罰もない」という罪刑法定主義の原則へと法定の刑罰を確認した。この確認によって、ゲルツエンゾンによれば、「法律的世界観がブルジョアジーの古典学派による世界観として現れた。」<sup>3)</sup>

ところで、タガンツエフ自身はどのような立場にあったのであろうか。この課題に対して日本を始め、革命前のロシアにおいてもドイツ刑法学からの影響を無視することはできない。それは、例えば西欧、とりわけドイツ刑法学から「近代」を学んだ日本の刑法学が

<sup>1)</sup> 放送大学三重学習センター 所長

<sup>2)</sup> A. B. Наумов, Российское уголовное право. общия часть. 1997 г. с. 41

<sup>3)</sup> A. A. Герцензон. Уголовное право общия часть. с. 40. 本書の出版元は、全ソ法理学研究所であり、発行年は1938年である。また、本書の後継書として、第2版が1939年に発行され、1943年に第3版が発行されている。

ドイツ刑法学のイデオロギーを継受した顕著な例であろう。そこには、遅くして「近代」の仲間入りした日本における刑法学を構築するための学派イデオロギーやシステムの照射が行われていた。このように同じことは帝政末期であり革命前夜であった時期のロシアでも、刑法学派間対立がおこなわれていた。

しかし、その対立的論争の流れを断ち切った出来事が、ロシア革命であった。ソビエト政権は、労働者と農民のための刑法という法の階級性を宣言した<sup>9)</sup>。

## 二、現代におけるタガンツエフの評価

現代におけるタガンツエフ評に移ろう。

まず、紹介するのは、現代ロシアの著名な刑事法学者であり、研究の守備範囲も、刑法、刑事訴訟法、犯罪学など広い分野で活躍した、クードリャフツエフ博士（元ソ連邦科学アカデミー付属国家と法研究所所長、アカデミー副総裁などを歴任）および（ザゴロドニコフ）Н. И. Загородников著『タガンツエフ（Н. С. ТАГАНЦЕВ）』に寄せた「序文」の概要である。

われわれの文献のなかで、近年、不当に忘れられたか、かつて一面的で、誤って評価されていた祖国の科学や文化の活動家についての伝記がしばしば現れている。今のところ、それらのなかに法律家はいなかった。これは、学者の才と聡明な国家の知性を兼ね備えていた、傑出した革命前の法律家の初めての伝記である。

150年も前に生まれた人の伝記が、2つの事情によって現代の読者の注意を引きつけている。第1に、この者が文学者または画家、社会活動家または大学教師であれ、われわれにとって、この者の行ったことが重要であり、興味深いことでありうるということ、つまりその仕事が後生の記憶のなかに残っているということである。そして第2に、とくにその作品に具体的な人生の事情の影響を見ることに成功したとしても、その人生そのものに注意を引きつけられることにある。

タガンツエフについてのザゴロドニコフの概説のなかには、これら2つの側面が極めて詳細に見られる。

タガンツエフは、ロシア法の傑出した理論家である。クドリャフツエフは、彼の基本的な作品を詳細に分析し、学説がどのように発展して行ったか、どのような基本思想が多作な学者のモノグラフのなかに表現されているかを明らかにしている。タガンツエフの著作によって、革命前の刑法学者ばかりでなく、いく世代かのソビエトの刑法学者が教育されてきた。おそらく、学説の発展は伝記資料、個人な事情や社会的な出

来事の下で、あるいはこれらに関連して見られるということがより人を引きつけるのである。

タガンツエフの初期の活動範囲は、教育・研究にあった。それは、彼に対しすぐれた大学教育に接近することを可能にし、教授や教師のなかに支配的である雰囲気になせ、学生に近づけることになった。彼は、ロシア社会の生活によく通じていた。というのは、学生や生徒がロシア国民のすべての層の代表からなっていたからである。こうした事情のなかで彼の教師の才能があらわれ、学者として傑出した。タガンツエフは、いくつかの大学の名誉教授に選ばれ、その生涯の最期には、ロシア科学アカデミーの名誉会員に選ばれた。彼は、そのモノグラフ“ロシア刑法講義”に対し、学術的な仕事への最も権威ある賞—スペランスキー伯爵名称の賞が授与された。

タガンツエフの活動の第二の分類は、公務と関係づけられる。彼は元老院議員であり、次いで統治元老院の刑事破棄部局—ロシアの最高裁判機関—の議長であった。彼は、幅広い、そして深い知識、高い道徳と独自の思考を求める裁判官の責任とともに複雑な責務を履行しなければならなかった。さらにタガンツエフは、元老院議員として、裁判手続き改革の方針、刑法や刑事訴訟法の基礎づけについての重要な法案の“計画立案”の各種委員会に参画した。高齢になって、タガンツエフは、ロシア国家評議員に任命された。彼は、最初のロシア議会法の編纂に積極的に参画した。タガンツエフは、国会の召集と国家評議会を議会の高いレベルの議院に変革したのち、この議院の全期の会期に参加し、法令立案委員会の委員に選ばれた。

タガンツエフは、多大の努力とエネルギーを社会活動にも費やした。彼は、サンクト・ペテルブルグ界の刑事部門の副議長に選ばれ、ヴィシニーヴォロツスキーという郡の議会の議員として登録されており、若年の法違反者のための農業コロニーや手工業労働養護施設の理事でもあった。

ネクラソフが参加してトウルゲーネフによって設立された、困窮している作家や学者を救済する団体での事業（文学基金）が、特別な才能ある人、努力の人や機転ある人を求めた。多年にわたって、タガンツエフは、文学基金委員会の毎年改選される議長、副議長および委員として実り多い仕事をした。彼には、多くの有名なロシアの作家と国との信頼関係が維持されていた。

本書の著者は、タガンツエフのイメージをその後の積み重ねや歪曲から一掃し、彼を革命前ロシアのすぐれた民主主義的な活動家として客観的に評価している。タガンツエフは、「すぐれた法律学者であり、責任ある政府の各委員会に関与し、帝政の裁判に献身的に仕えることや人に対する思いやりを兼ね備え、リベ

<sup>9)</sup> 稲子恒夫教授は、1930年代後半の地方党幹部について、次のように述べていた。「1930年代前半の新入党員の多くは暴力的農業集団化と第一次五カ年計画のときの貧農活動家と農村出の未熟練労働者であり、彼らの教育水準は低かった。」このように人員の量的増加を満たしたものの、質的確保には問題があったことを次のように指摘した。「1937年をピークとする大テロでは裁判と裁判以外の方法が使われた。」（稲子恒夫著『ロシアの20世紀』2007年、424-425頁）。

ラルな意見、ヒューマニズム、そしてまた真の人間性をもっていった」(86頁)という結論に同意する。タガンツエフの個人的資質が、現代の人々や後世の人々に当然の尊敬を得ていることは決して偶然ではない。

ザゴルドニコフの書は、特に問題が理論家と国会議員の素質を自分のなかに調和させている非妥協的な学者にあるとしたら、学問の道はどれほどむずかしいかが説得的に書かれている。この点で、タガンツエフの生涯の多くの面が、彼の性格と学問上の功績を含めて、かなり後まで生き残ったが、多くの困難な時期を体験した、バルナドスキー、バビーロフ、チャヤノフ、カロリエフといった傑出したロシアの学者の伝記と比較されるに十分である。タガンツエフの生涯と活動についての概説は、若い読者—法律家にとって、学問、真理および正義への真の奉仕の例として有益であろう。その意味が決して輝きを失わない全人類の価値として。

以上のように、クドリャフツエフのタガンツエフ評はすこぶる好意的であった。この「序文」は、ポスト社会主義社会をめざし、そのための刑法理論を構築しようとする宣言でもある。それでは、現代ロシア連邦における刑法学には、タガンツエフの極めて良好な評価を宣言した背景に復古的基調があるのであろうか。そうであるならば、帝政期の刑法学との「連続性」は、形式的な構成においてであるが、「ある」と言える。

ロシアの刑法学界も、それぞれの学派間の争いがロシアの刑法学界でもみられる。このような状況をかえりみると、広大な国土を持つロシアと地球の東端に位置する日本からヨーロッパへ向かう距離感とヨーロッパを絶えず意識し、憧れをもち続けたロシア帝国との精神的距離感はまったく同一とはいえない。しかし、それでもロシアにとってはヨーロッパ文化に憧れを持ち、法律編纂やその他のヨーロッパ文化は相当魅力であったと思われる。そのために、革命後社会主義政権が成立したのちに、根本的、基礎的理念の客観的現れや法の適用の変革にいたるまでにはいかなかった。

(2) もう一人をあげておこう。ナウーモフによるタガンツエフ評である。ナウーモフは、自書、『刑法総論』のなかで、タガンツエフ著『刑法総論』(1902年)を紹介し、彼についての評価(15頁)を述べている。タガンツエフは、いわゆる刑法の古典学派の代表者の一人とみなされている。晩年は、いわゆる法律的世界観の代弁者であった。それは、法規範の内容を立法者の意思というよりも、社会(政治的、経済的、精神的)生活の条件のなかから、結論付けた。そのような

やり方は、長所でも、短所でもあった。古典学派は、刑法ドグマの研究、刑法規範や法律的概念としてのその他のカテゴリーの研究において、刑法学の頂点に達していた。他面から、犯罪や犯罪性の課題を社会生活の社会経済的条件、犯罪性の原因の基礎を保障することの根拠、犯罪性の激増に対する回答はできず、これとの闘争に適応な刑事処分を検討することもできない。この点で、古典学派も、刑法学に新しい学派—人類学派や社会学派に非難が向けられた。「古典」という名称は、この学派の支持者によって付けられ、社会の現代的要求にそぐわない古典学派者たちの理論的見解も含んでいた。

もちろん、タガンツエフの講義には、同時代の原則—「法律に規定されていなければ、犯罪はない」を含む刑法の主要原則に忠実であること、法ドグマの全面的、綿密な分析を支えられることが重要である。

ザゴルドニコフの以下の見解に同意しなければならない。「タガンツエフは、われわれの文献の中にある刑法学者を古典、社会、人類学派という区分に同意しない」。法律学の発展のなかで彼の立場は、刑法における古典学派と社会学派に近い。現代刑法はある一つのイデーに作られるものではない。少なくとも、刑法、犯罪、犯罪の客体、刑罰などのような刑法カテゴリーとその理論的分析が必要である。

ソビエト法律学では、ドグマ的方法是根拠なきものである。刑法の方法論も、刑事司法の範囲内はなく、法適用もない。

タガンツエフは、ロシアの文献の中にある、刑法学者を古典、社会、人類学に区分することに反対した。」現代刑法は、あるひとつのイデーに左右され得ない。もし科学性や現代性を求めるならば、刑法における古典学派と社会学派を総合することにほぼ運命付けられている。

もうひとつ、ザゴルドニコフによるタガンツエフ晩年の評価である。そこには、「二つの革命の目撃者：希望と悲劇」と題されたタガンツエフ論が展開されている。少し長いがタガンツエフという人物を知りうる上で重要であると思われるので、あえて再録する<sup>④</sup>。

タガンツエフは、国会議員であり、学者であった。彼は、ロシアにおける諸問題の経済的、社会的状況についてよく情報をつかんでおり、正確に理解していた。彼は、「謎めいた」ラスプーチンの宮廷での出現と関連して生じた、独裁体制の崩壊、国家統治の欠陥、ばかげた言行を見た。タガンツエフは、この人物の有害さ、ばかげた言行および狡知さを見ながら、国家会議の演説のなかで、彼に政治的舞台から去ることを求めた。

変な人物に指導されるという条件のなかで、君主体制の無能さは、タガンツエフにとって疑いのないこと

<sup>④</sup> 晩年のタガンツエフの生活は、悲嘆に暮れたものであった。以下は、ザゴルドニコフ著『ニコライ ステパノビッチ タガンツエフ』からの引用である。直接的には、私の「刑法学と人間(3)」(三重大学『法経論叢』15巻2号71頁、1998年)による。

であった。このため二月革命は、彼にとって「晴れた空のなかの雷鳴」ではなかった。

革命前夜の国内情勢は、日々緊迫していた。戦争の敗北、君主制国家体制の上層部の腐敗、食料の補給を阻害する都市の不満の増大、インテリゲンチア、労働者や農民のなかの革命的気運の高揚は、社会を毅然とした行為へと論理的に導いた。

タガンツエフの言葉によれば、「古い秩序のしもべまたは追従、国家が生命の自由を奪うという不潔で、生彩のないまたは利己的活動」からなっていた君主制の支配的な組織は、優柔不断なツアーリをいただいて崩壊した。タガンツエフは、宮廷に近い大多数の高官の凡庸さ、利己主義や犯罪にさえ気づいていた。彼らの多くは、公費でその個人的問題を解決していた。「老いた国家的巨人—タガンツエフは述べた—は、地面にしっかりと伸びた根がすっかり腐っているかのように、そんなにも早く、そんなにも容易に崩壊し、世界を驚かせた」。

タガンツエフは、二月革命をその歴史的意味に大きな期待と理解をもって歓迎した。彼は、国家会議の執行委員会によって布告された措置を好意的に迎え、臨時政府の創設を歓迎し、後方と前方にいる軍隊が参加する一般、平等および秘密投票にもとづいて最も短期間に憲法制定会議を創設するという決定に賛成した。

彼はすでにこの時、立憲君主制を美化することをやめていた。彼は、問題が君主の人格、ニコライ二世の無能や優柔不断だけではないということを確認していた。タガンツエフは、ロシアに形成された君主制には、国家管理のなかに抜本的な変革を実現させることが不可能であるという結論を導いていた。

タガンツエフは、愛国者であった。しかし彼は、10万人の犠牲者を出した戦争が民族間や国家間の紛争の解決へと導き得たとは考えなかった。彼は、戦争を大量、合法で、無意味な殺人と考えていた。このため戦争には反対した。新しい政府が戦時地域内に古い、打倒された制度の政策の実現を延長させたことは、彼を困惑させた。彼は、この戦争の破滅を見た。それは大量殺人政策と無関係であった。彼は、すでに国家会議で戦争必要補助費に反対の票を投じていた。

彼の側からの熱狂的な反応に、死刑廃止についての臨時政府決定とその特赦令が引き出された。

彼は、大きな感激をもって書かれた論文のなかで、多年にわたって彼が説いてきた死刑廃止思想がついに現実に具体化したことに満足の意を表明した（タガンツエフ、死刑廃止、「司法省雑誌」1917年2—3号、9—14頁）。

「臨時政府が死刑を廃止したという知らせに、崇高な叫びが私の胸のなかから出た—と、タガンツエフは述べた」。

タガンツエフは、ロシアの刑法学や文学のなかで、死刑は決して擁護者を見いださなかったことを誇りにした。

二月革命ののちに臨時政府は、特赦を広げた。それ

は、政治犯罪にも広げられた。ペテルグラー、モスクワその他の大都市では、専制との積極的な闘争、皇帝専制体制で禁じられていた党の有名な活動家や指導者が戻ってきた。

監獄や流刑から戻った、ツアー専制の犠牲者や過激なインテリゲンチアたちが「デカプリスト」団体を設立することを決定したとき、タガンツエフは、これに極めて好意的であった。彼は、複雑な社会条件のなかでこの団体の設立集会に参加した。その代表はヒゲネルであった。タガンツエフは、この集会の過程で初めてザスリチと会い、知り合った。彼は、1878年当時有名なペテルグラー市長トレボフ殺害未遂裁判で無罪となった人物であった。この集会で、団体の幹部会が形成され、タガンツエフもこれに選ばれた。しかし、その後、このイニシアチブは実を結ばなかった。

学者の意気揚々とした気分は、おそらく非常に長続きしなかった。「大戦争」（彼はドイツとの戦争をこう呼んだ）は、多数の同国人の生命を奪い続けた。

タガンツエフは、十月革命を冷静に迎えた。タガンツエフは、十月事件をロシアの大多数人民の運命にとって変革のものとして受け入れなかった。彼は、将来への希望や期待を国家による管理のなかでの民主主義的变化と関連させていた。彼は、憲法制定会議に期待し、政治分野での革命的、暴力的な方法に賛同しなかった。

その間、国内での生活は続いていた。大学が活動し始め、ロシア科学アカデミーの活動が続いた。

1917年11月4日、ロシア科学アカデミーの第14回大会で、ロシアの著名な刑法学者タガンツエフをロシア科学アカデミーの名誉会員に選出することが提案された。この提案は、満場一致の賛同を得、科学アカデミー総会の次の12月大会で選出をする旨の決定が採択された。

科学アカデミー総会（1917年12月2日第17回大会）では、ロシアの著名な刑法学者タガンツエフをロシア科学アカデミーの名誉会員に選出することについて代議員による投票が行われた。

行われた投票により、2票の「選出不可」が出たものの、提案された候補者は満場一致で選出された。

タガンツエフは、ロシア科学アカデミー常任書記オリエンブルグ宛に感謝を込めての返事のなかで、生じた問題を打ち明けた。「これは、なぜ起きたのか。私を選出することを提案した尊敬すべきアカデミー会員とこの提案を採択し、肯定的に許可したアカデミーは何によって指導されているのか」。

タガンツエフは、リベラルな急進主義者だけでなく、徹底したヒューマニストでもあった。このため残酷な専断的行為、根拠のない抑圧や苛酷なテロ行為をとくに嫌った。

### 三. 悲劇のはじまりとおわり

1919年—20年に若きソビエト共和国でおこった容認

できない、不当で、残酷な抑圧の嵐は、タガンツエフの家族も避けることはできなかった。

1921年7月に、夜半にリテイン通りにあるタガンツエフの住居にチェカ（秘密警察）員が現れ、家宅捜索を行い、息子、その妻を逮捕し、多くの物（そのなかにはタガンツエフ個人の物も含まれていた）を押収した。

息子の逮捕ののち、その幼き子供たちは、孤児院に入れられた。略

息子の逮捕は、タガンツエフに深いショックを与えた。彼は、その息子がチェカの権力によっていかに困難な、複雑な時を過ごさせるかをよく理解していた。彼は、息子の政治的意見や傾向をよく知っていたし、その生活やその妻の生活を常日頃見ていたので、息子がボリシェビキに対して厳しい態度をもっていることを納得していた。しかし彼は、公式に説明されたボリシェビキによる赤色テロル政策の事情のなかに、誰も保証されないことをよく知っていた。従来通りチェカの法廷や会議の決定により銃殺ばかりでなく、逮捕者の殺害も幅広く行われていた。そして彼は、その息子に厳しい措置が迫っていることをどうしても予想できなかった。

息子が逮捕されたのち、1921年7月16日、タガンツエフは、ソビエト政府首脳に息子の関与の軽減についての嘆願を求めた。嘆願書には、彼がペンザの住居にその父が行き来していたときに、ギムナジウムの学生であったことも書いた。彼は、これとともに手紙のなかで彼の私物が没収されたことも悲しんだ。レーニンの手紙やその他の文書になかに、次のような資料がある。

「秘書への依頼とカリーニン、エヌキーゼ、クールスキー、ジルジンスキーへの手紙

いますぐ以下の者への5枚の複写をとること

- 1) 全ロシア中央執行委員会議長または副議長
- 2) 全ロシア中央執行委員会書記
- 3) クールスキー
- 4) ジルジンスキー

そして用紙に次のような私からの手紙をそれぞれに書き込むこと

ふたつの部分（関与の軽減とタガンツエフの住居からの私物の押収）についてのこの申請を速やかに検討することと、たとえどのような短いコメントであろうとも私に伝えることを拒否しないことを強く求める。

人民委員会議議長 レーニン

1921年6月17日 署名

この依頼には、1921年6月17日付のレーニンの署名が付いている。

クールスキー（当時、司法人民委員）は、1921年7月5日、タガンツエフの息子事件についての結論をレーニン宛に送った。そのなかで、彼は反革命組織「ロシアの復活」でのその積極的な役割と関連して厳しい抑圧に処さなければならないことが示されていた。6月18日付全ロシア中央執行委員会幹部会の命令によ

り、タガンツエフの私物は、彼に返された。

手紙への反応は、異常に素早かった。レーニンに手紙が発送されて二日ののち、タガンツエフのもとに家宅捜索で押収された物が返却された。しかし彼の息子の関与についての何らの色よいものは伝わらなかった。

去年と同様に、今夏タガンツエフは、街で過ごした。高齢の学者がペテルグラーデに住んでいた家には、彼の親戚、友達、同僚が訪ねてきた。タガンツエフには、彼の学生が訪ねてきたり、孫を連れて娘とその夫がやってきた。その家屋には、よい図書室があり、異なった種類のモスクワとペテルグラーデの新聞が取り寄せられた。家の住人は、国内の出来事も、国際的出来事にも大きな関心を寄せていた。

新聞によって、ニコライ ステパノビッチは、自分の息子とその妻の処刑を知った。

全ロシア反革命・サボタージュ取締非常委員会の1921年8月29日付発表「ソビエト政権に対する陰謀のペテルグラーデでの摘発について」のなかで、以下のことが述べられた。「8月24日付ペテルグラーデ非常委員会の決定により、ペテルグラーデにおける陰謀に以下の積極的な関与者が銃殺に処せられた。1) タガンツエフ ウラヂミール ニコラエビッチ、地主、地理学教授、非黨員、サブロペレフスキー委員会書記、ペテルグラーデ戦闘団体の長および指導者、軍事的暴動や政治的および経済的テロの戦術によってソビエト政権を打倒することを目的に行った」。

それにもかかわらず、息子の処刑は、疑いなく、タガンツエフの生活のなかに悲運な役割をはたした。彼は、士気を低下させ、銃殺された反革命主義者の父および「古いレジームの手先」として高齢の学者が家のなかにとどまっていることは、身体を悪くさせた。幾人かの彼の学生たち、同僚や友人は次第に疎遠になっていった。

タガンツエフは、1923年3月22日、ペテルグラーデで80歳でなくなり、ミトロファニエフスキー墓地に埋葬された。

歴史は、現実的な人格を見せることなしにすまない。研究者が社会の社会構造、階級、出来事などのみの叙述に制限されるならば、歴史の真実から離れてしまうであろう。これは必要であろう。しかし才能や煮えたるエネルギーによって人民の運命に影響を与えた、その時代の優れた活動家を見ることなしに、知性にばかりでなく、社会や国家の政治的、経済的、社会的、精神的発展にも影響を及ぼし、歴史が科学であることをやめ、イデオロギー的全体主義の成分となるのであれば、人間と人民の道徳形成の可能性を失うことになる。

タガンツエフは、前世紀の後半分と今世紀の初めの20年においてそのような人格であった。

彼は、ロシアばかりでなく、西欧にもこれに優るものがない刑法の総論と各論の研究を残した。新しい刑事立法の編纂についての彼の仕事は、同等のものをも

たない。彼が成し遂げた刑法の源の系統化、その注釈化や度重なる改訂に関する仕事は、またとないものであった。

彼は、百科全書的な豊かさと余すところなき深さと確実さをもって、幅広く知られている人物ばかりでなく、初学者にも科学研究の広大な様相を与えることができた。それらは、法規範の歴史、適用過程のなかで明らかにされるその弱い面の批判、現行法の改善についての説得力ある提案を含んでいる。

哲学、法律学、歴史学の最新の成果を総合化する彼の能力は、すばらしいものであった。ロシア語ばかりでなく、ヨーロッパの多くの言語でも述べられた理論構想や法律理論は、彼にとって容易なことであった。

彼の仕事は、人間への心からの、深い愛、ヒューマニズムと慈悲深さによって満たされており、それらは論理的な根拠あるものであり、妥協しないものであった。彼の生活態度は、ねばり強い巨人的努力、誠実さによって照らされていた。彼は、うそ、偽善や追従を許さなかった。このため学者の仕事は、時の流れの影響に屈することはなかった。

トライニンは、タガンツエフの死去に関して、次のように書いた。「……タガンツエフの理論の多くは、今日争いがあり、誤ったものと思われる。しかし学者の誤った考えは、決して彼の仕事についての成果を否定するものではない。タガンツエフは、刑法学のための歴史的展望のなかで、深く、意義深く出現した。……その独自の理論的杓子定規にこだわった特性がタガンツエフのなかに存在していた。それは、深いヒューマニズムであり、人間に対する真の、心からの愛であった。ここに、ドグマ的分析の鋭く、骨のおれるわざを受け入れるために、タガンツエフの「講座」や講義のそうした箇所に向けるとは無駄ではない」（『法と生活』1923、5—6、108頁 露語）。

学者であり、社会活動家、国会議員であったタガンツエフがおこなったすべてのことは、われわれの多く

の苦難を経験した社会の生活のなかでの急激な出来事も、わが国の法の「搾取者的遺物」との官制イデオログの執拗な闘いも、革命前法律学の「反動的本質の摘発」も、ロシアの文化の宝庫のなかから止めることはできない。

#### 四. おわりに

帝政時代、特にその後期にこれらの学派の枠にとらわれないで、新しい時代のロシアの論戦が見られた。それはドイツ刑法に見られるほどの厳格さはないものの刑法理論・学派をめぐる学者のアイデンティティを見ることができる。たとえばタガンツエフの場合、古典派に属していた（中山）。しかし、タガンツエフは死刑廃止の「立場」であった。中山研一教授の見解によれば、「タガンツエフは古典派に属するといわれるが、しかし彼の見解は刑法理論の基本的問題について、古典派の見解を離れ、さらにこれをこえている」（中山研一『ソビエト法概論 刑法』1966年55頁）。私も、このような指摘に同意する。そのうえで私は、タガンツエフの世界観・人生観といった人間観に支えられた人物研究の魅力を感じている。

慈悲なき公正は、公正ではない。無慈悲である。  
公正なき慈悲は、慈悲ではなく、愚かである。

法律に書かれてあることは、善である。

法律の解釈とは、その言葉を理解するだけでなく、その意味を理解することにある。

上記の言葉は、タガンツエフ著『刑法総論』の冒頭部分にさりげなく書かれている。

(2017年10月11日受理)